

山北町立川村小学校

研究テーマ：人権を尊重し、互いに認め合い励まし合って、ともに伸びていく子どもの育成
～学ぶ喜びを感じる授業の創造～

1 実践の目的

昨年度から「学ぶ喜びを感じる授業の創造」を副題として研究を進めてきた。「子どもを主体とする授業」と「対話的な学びを生かした授業」を研究の重点とし、子どもたちにとって深い学びになるよう、授業研究を積み重ねてきた。その中で、魅力ある地域素材を扱うことが子どもたちの主体的な学びにつながることや、子どもから生み出される問いを中心に、子どもの言葉で授業を創ることの大切さなどについて感じる事ができた。一方で、子どもの考えをつなぐための教師の役割や追究課題に迫る資料の在り方、個の特性に応じた学びや単元のデザインなどについて課題も見られた。そして、子どもたちが「学ぶ喜びを感じている姿」とは具体的にどのような場面のどのような姿なのか明確にする必要が出てきた。

このような課題を受けて、今年度は社会科に加えて生活科を研究教科として加えた。そうすることで、子どもたちが自分たちの「問い」や「願い」に対して、切実感をもって取り組み、追究していけるような授業づくりや単元構成について学校全体で取り組むことができるのではないかと考えた。また、授業研究の中で、子どもたちの姿を丁寧に見取り、子どもの姿で語り合う研究協議にすることで、子どもが学ぶ喜びを感じている具体的な姿が見えてくるのではないかと考えた。子どもも教師も、一つの教材・授業・単元に対して、主体的・対話的に楽しみ

ながら学べる授業研究をめざした。

2 実践の内容

（1）山北町の良さを生かした教材開発

山北町には、地域に魅力的な「ひと、もの、こと」がたくさんあり、学校教育にも協力していただいている。そこで、その身近な「材」を教材として取り上げることで、子どもたちが切実感や相手意識をもって学びに向かえるのではないかと考える。山北町の一貫教育・保育に位置付けられた「やまきた学び」のねらいである「身近な地域や山北町に対する関心や愛着を深め、ふるさと山北への誇りを育てる」ことにもつなげていきたい。

（2）子どもの姿で語り合い、教師一人ひとりの学びを共有できる研究協議

研究協議は、子どもの姿（事実）を基に語り合うことが大切なことだと考える。そこで、年間を通して、研究協議のテーマの一つを「その時、授業が動いた」に設定し、子どもの発言や考え、表情などを見とれるように授業を見る視点を明確にしていく。実際の授業における姿から語り合うことで、その姿が生まれるきっかけとなった教師の働きかけや発問、子どもの思考について話し合うことができるのではないかと考える。

（3）0歳から15歳までの一貫教育・保育について

今年度に研究教科として加わった生活科

は、子どもの願いから学習をスタートさせていく。その際に、教室の環境や教師の声かけが子どもたちの活動に大きく影響してくる。そこで、園での保育にヒントを求めることにした。園での活動や環境設定について小学校で取り入れることができれば、幼児期から児童期への接続がより円滑に行われるのではないかと考える。接続期の子どもたちがつけてきた力を小学校でも発揮できるよう、幼稚園・保育園・こども園と小学校の互いの教育活動についての理解を深めていきたい。

3 実践の成果と課題

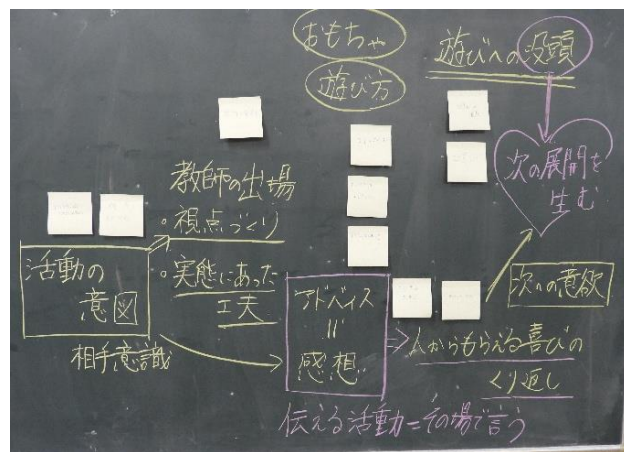
(1) 山北町の良さを生かした教材開発

社会科の授業研究では、どの学年でも地域の教材を扱った。地域の教材を扱うことで、子どもの主体的な学びを支えることができた。「社会科の学習は楽しいですか」というアンケートをした際にも、9割以上の児童が肯定的な回答をしていた。これは、地域の教材を扱ったことで、身近な地域について問いを立て、自ら動いて調査し、人の思いにたくさん触れることができたからではないかと考える。

(2) 子どもの姿で語り合い、教師一人ひとりの学びを共有できる研究協議

研究協議では、「その時、授業が動いた」をテーマにし、子どもたちの授業での様子や発言などの事実をもとに協議を行った。子どもの姿で教師が語り合うことを通して、子どもの学びに教師がどのように関わっていけばいいのか、子どものこの発言につながった要因は何かなど、これからの授業実践につながるような協議をすることができた。協議の最後には、学びのキーワードを教師一人ひとりが書き、相互指名で発表をし

た。こうすることで、研究授業や協議を自分事として捉え、教師自身も主体的に参加することができた。研究会の回を重ねるごとに学びのキーワードが焦点化され、研究の積み重ねを感じることができた。



(3) 0歳から15歳までの一貫教育・保育について

生活科の環境設定や子どもたちの見とりについて岸幼稚園の先生方に協力していただき情報交換を行った。子どもたちが保育の中でどのような力をつけているのか、そこに教師がどのように関わっているのかなどの話を聞くことで、小学校でどのような学びにつなげることができるのか考える機会となった。園の先生方には、研究授業・協議にも参加していただき、園と小学校の接続についても考えを共有することができた。

4 今後の展開

今年度、「学ぶ喜びを感じる授業の創造」を副題として研究を進めてきた。身近な地域を題材とした教材開発や研究協議を通して、研究の積み重ねを感じることができた。しかし、教師主導による資料の提示や授業展開など未だ子どもが主体となって学びに向かっているとは言いがたい状況もある。子ども一人ひとりが学びの主役となり、学習を進めていくための授業について来年度以降、学校全体で取り組んでいきたい。